亦能爲癬、而癬內實有虫也、

〔一本堂行餘醫言六下〕癬蘇典切、音鮮、

癬亦疥類、痒疾也、故古連稱疥癬、大槩有二種、一種瘡作圓文、如錢形、邊高中低、邊生細粟瘡、甚痒、搔之汁出、漸展、連生二三瘡、四五瘡、大者作斜形扁形、大小無定、粟瘡中、間有細蟲、多生面頰肩項兩手、間有生腹背兩脚者、以其似錢形、故俗呼爲錢瘡、此證易治、一種瘡生陰股、始如粟粒、甚痒難堪、搔之汁出、或唯白屑起、漸延自陰毛中、及臍下少腹、至臍上、或自會陰左右展兩臀、上腰下、足、遍體無所不至、皮漸頑厚、色淡黑、殆如牛頷皮、有至苦痒終夜不寐者、以其陰股特多甚痒、故俗謂之陰癬、多著男子、婦人至稀、此證極難治療、〇中略

附字辨

癬或作癚、音同癬、劉熙釋名云、癬徒也、浸淫移徒處日廣也、故青徐謂癬爲徒也、此說亦幾乎鑿乎、从徒則可言、从鮮則不可言、史記越世家云、吳王伐齊、子胥諫曰、吳有越腹心之疾、齊與吳疥癚也、又省作疵、正字通云、俗作蠥者恐非也、玉篇云、蠥蟲名、由音同爲此說耳、決不可用也、又康熙字典云、瘮得案切音旦、癬病此亦不可取也、

〔倭訓栞中編加四〕かぶれ　漆瘡をうるしかぶれといふ、倭名抄に見え、職人歌合にも見えたり、氣觸の義也、又東鑑に蚊觸と見えたれば、もと蚊に觸て瘡疥を生ずるより名づけ初たるにやともいへり、或は疱をよめり、集韻に痒也と見えたり、

〔類聚名物考病癘一〕かぶれ　臭觸歟　蚊觸明月記

これは俗言なり、明月記に蚊觸と書しは借字なり、さりながらも夏のほどなど、蚊に喰るれば、その所に小瘡の出來しは、かぶれたるに似たれば、さも推てはいふべけれども、もとこの詞は、その病のおこる所を思ふに、或は漆の臭氣にふれておこり、又は膏藥などにもみなその氣に觸てお

蚊觸